

修身初訓 二

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
門		
倫理學部		
類別 番號	第	項
日		
全	冊ノ内	冊
分類 番號	第	號
154		

T 1A1

22

MI 77b

14

修身初訓卷之二

緒言

此篇ヲ初等第二年後期ニ
用井ル所トス第一章敬身
ヨリ起リ衣食之ニ次キ人
倫之ニ次キ處事之ニ次キ

勤學之ニ次キ堅志ヲ以テ
終ル凡ソ修身ノ書之ヲ讀
メトモ履行セサレハ讀マ
サルガ如シ

編者誌

修身初訓卷之二

宮本茂任編輯

宗盛年校閱

第一章

○孔子曰く言忠信行篤

敬をらハ、蠻貊の邦と雖
行ハれむ、

○心を立るハ、忠信欺

をるを以て主本と_定ハ、_{胡文}

○人道ハ唯忠信ハあり、
君父ハ事ふるも、誠信ハ

けきハ忠孝ハ非、_{大和俗訓}

○孔子曰く、門を出るハ

大賓を見るハ如く、民を

使ふハ大祭を承るハ如

○敬ハ徳の聚る也、能敬

すきハ必徳あり、左傳

○敬すれハ、萬善俱ふ立ち、怠きハ、萬善俱ふ廢る、

真西山

○凡そ百事の成るや必敬あるふ在り、其敗る

や必之を慢るふ在り、荀子

○安樂なる時も、敬すへ、敬あるハ、後の禍なく

後の悔なく、初學訓

○敬ハ古の聖賢の心法なり、万善是より行ハる、

同上

○凡そ門を開き、簾を掲
るふ、徐く、輕手く、震驚せ
志む可らば、童蒙須知

○器物を執てハ必端嚴
ありて、唯失する阿らん

ふとを恐る、同上

○凡そ夜行くふ、必燈燭
を以てす、燭なけきハ則
止む、同上

○凡そ外ふ出てハ、歸ふ
及て、必長上の前ふ於て

捐をふ
せ、暫出
つと雖
亦然り。
同上

○藤右



相三守、夙ふ大學ふ入る
經を受く、後學生に遇ふ
必車より下る

第二章

○男子三緊あり、頭緊腰
緊、脚緊をいふ、頭巾條帶

鞋襪此三の者緊束を要
に、童蒙須知

○凡そ衣服を脱ゝハ必
齊整し箱篋中へ摺疊せ
よ、同上

○破き綻れば則之を補

綴す儘補綴するハ害な
し、唯完潔なるを用ゐよ、
同上

○凡そ勞役ふ就くふた
上襲の衣服を去れ、唯短
便を着、愛護して損汚せ

志むるなかれ同上

○凡そ飲食を喫するは

揀擇し去取するからん

范益謙座右戒

○蔬食口を馴せし味あ

るて肥濃なるを羨する

淡薄なれし身を養ふ

小宜し樂訓

○禮記小曰く酒は以て

老を養ふ所なり以て病

を養ふ所なり童子恣に

飲へし理あらん童子訓

○玩物を寶とする者、之
を藏る日ハ多し、て、之を
賞する日ハ少し、張魯叟

○物を玩ふハ三の費ハ
一ハ功を費し、二ハ賤
を費し、三ハ氣を費す、初学
知要

○人知足の理を忘る可
らず、足るを知きハ貧賤
よりて樂し、足るを忘ら
されハ富貴を極きとも
猶阿さねらに、樂訓

○賤利を貪て義理を捨

るハ、雀を捕ん爲寶玉を
擲つゝ如く

初學訓

○宋司馬君實乳兒の時
より華靡を喜び、長者加
るふ金銀華美の服を以
すれハ羞赦して之を棄

去きり

第三章

○聖人の道を、五倫を以
て宗として、父母初學訓不孝を
盡すを、五倫の初と爲す
○凡そ父母命ある事ハ

らハ慎てまゝ勢て早く
行ふへ同上

○人倫の内み交り久し
まハ兄弟なり其親と久
しきを樂むへ同上

○兄を父ふつぎ貴し弟

ハ父母の子なれハ我子
よと愛すべし同上

○曾子曰く親戚悦ハさ
れハ敢て外み交らば
○氣を下し色を怡む
聲を柔ふまゝハ特父母

事て然るへきのみな
らす已ふ處一人を待つ
皆此六字を體あへ呂氏
○朋友の間ふ於て其敬
を盡する者日ふ相親與
效を得るふと最速々な

程伊川

○凡そ朋儕の中ふ在て
切ふ自滿を戒む惟虚く
す故ふ能受く滿きハ則
容るゝ所な許平仲
○凡そ長者の側ふ侍る

ふ必言を正く手を拱
ふ問ふ所あらば則誠實
ふ對へ言妄まらへから
す

童蒙須知

○事を人ふ問く虚懷
を要し毫も挟む所ある

へからば言志耄録

○人ふ替て事を處する
に周匝を要し稍缺く所
ある可らば同上

○人と才能を争ふ可ら
ず人と威勢を争ふへか

らす初学訓

○藤原

吉野少

まよる

遊學一

手巻を



親す仕て中納言ふ至る
二親堂ふ在る定省虧る
ふとなし

第四章

○孔子曰く人遠き慮な
けきふ必近き憂あり

○戰々慄々、日一日を
慎む、人山ふ蹟く事をく
あて、埴ふ蹟く、堯戒

○人皆小害を輕く、微事
を易り、以て悔る、あくと多
く、同上

○患至りて而後之を憂
るハ、是病む者已倦、
而て良醫を索るゝ如く、
同上

○已未善ならざれハ、人
之を譽るとも喜ふ不足

らに已善あらは人之を
毀るとも怒はる足らに
薛文清

○ 國莽ふして煩志を
厭ふ者を決して成るふ
と阿る理を、顔子家訓

○ 煩しき小耐る二字最
妙能煩志を小耐へは天
下何事の做す可らさら
ん、費元祿

○ 君子患なき時小當て
常小患を思ひ豫之を防

けハ、則終ふ患なく、初学知要

○孔子曰く、忍ひされ

ハ、則大謀を亂る、

○盛怒の時、當て堅く

忍て、動うず心の平なる

を俟ち、審ふて之に應

をへし失なふ、庶幾ら

ん、許魯齋

○凡そ我才能、誇て争

ふ、禮義ふあらす獸の

角牙を以て争ふ、如し

大和俗訓

○事を處すは二法あり、知以て可否を別ち、義以て取捨を決すれハ斯
過舉なり、薛文清
○堯の時洪水あり、舜禹を擧て之を治め、志む禹

身を勞し、思を焦し、外に居ること十三年、三たび家門を過ぐれとも入ら
ず、孔子之を賢とせり、

第五章

○子思曰く、君子の道を

譬つゝ遠きふぢくふ通
よりするゝ如く譬へハ
高きふ登るに卑きより
するゝ如く

○聖人の尺璧を貴むに
あて、尺寸の陰を貴ふ、
淮南子

○盛年重て来らず一日再
晨なり難時ふ及て勦勵
すへく歳月人を待す
陶淵明
○大禹ハ聖人少て乃
寸陰を惜めり衆人ふ至
てハ分陰を惜むへく
陶侃

○生まて時小益なく死
して後小聞ゆる事とな
まゝ、自棄あり、同上

○學を為る、一日を一日の
効を見る處、一月を一月の
効を見るへし、朱晦菴

○閑話を説くなかれ、恐
くゝ光陰を費さん、雜書
を読む勿き、恐くゝ精力
を分たん、同上

○橘岑繼初學を好まず、
仁明帝の誠を聞き、慙て

學を勵み、官中納言ふ至
きて、

第六章

○大戴禮ふ曰く、高山ふ
升らされ、天の高さを
知らず、先王の道を聞

さき、學の大なるを知
らん、

○天地の性人を貴と
苟道を聞うされ、誠ふ
禽獸と異なるふとな

初學知要

○學ハ志を立る大と勇
猛なら志む魚、自進む
こやある魚、朱晦菴

○書小曰く、惟學ハ志を
遜り務て時小敏すきハ
厥修る大と乃來る。

○學問する者、只我智の
暗く、我徳の進まざるを
憂ふ。大和俗訓

○我小才智技藝阿ると
も、矜る心ある可らず。同上
○孟子曰く、原泉混混と

一、晝夜不舍を以て科を
盈て而後進み、四海を放る

○書に曰く、山を爲す、
と九仞功一簣に虧く、
○晋陶侃朝に百甕を齎

外に運
ひ、暮に
右齋内
小運ひ、
曰く、過
爾優逸



世人、恐くハ事ハ堪ハ
らん、

修身初訓卷之二終